

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-4

「まあ、何か変よ?変ですよ。私の知っている朝倉さんではないわ。紳士の匂いが消えてしまっている?」

真紀はわざと語尾を伸ばして言った。

BGMのヴァイオリンソナタは第三楽章までの約27分の演奏時間が終わり、同じ作曲家の【二つのラプソディ】が流れていた。

朝倉の頬に、また赤みがさしていた。プライドをそぎ落とされた男は口を歪めて、しばらく目を閉じていた。そしておもむろに気持ちと裏腹とわかる穏やかな作り声で言った。

「私の持ち出しも数千万を超えましたね。このままほうっておくと、今度ばかりは、横田もメディアの餌食になるだけではすまないでしょう」

真紀はじっと朝倉を見ていた。画商の肩口に心労が漂っている。間違いなく手詰まりになっている素振りだと思った。

「わかりました」

真紀は迂闊にも前のめりに言っていた。言ってしまってから、相手の調子につられた自身の甘さに気づいた。それでもブラームスのピアノ独奏曲を聴き取ることができた。

真紀は横田と過ごした日々の中から甘美な記憶の断片を引き寄せて、ピアノの旋律にのせると続けて言った。

「私にお役にたてることがあれば、協力したいと思います」

朝倉は、さながら駄々をこねて、欲しい玩具を母親から買ってもらった時の子供のような面持ちを見せた。

「恩に着ます。詳しい話はギャラリーへ行ってからにしませんか?」

「待って……、ここで話しして」

「会ってやってくれませんか?」

「気まずい思いをするだけです」

真紀は唇を噛んで朝倉を睨んだ。

「今の横田は見る影もないです。口には出ませんが、あなたに会いたがっています。ここに来るように伝えます」

朝倉は急いで胸ポケットから携帯電話を取り出した。

「どうなっても知りませんよ」

真紀の本気度に一瞬怯んだ朝倉は体をこわばらせて、次の動作を止めた。

真紀は『こはる』の顧客で落魄した同類の男を何人か見てきたが、ハリウッド映画のワンシーンのように四十一階の場面設定で登場するとは思ってもよらなかった。